

心ときめく60代を!

●富田千種さんのコンサートのコンサートが・・・!

昨夜は、ウィーン在住で声楽家の**富田千種さん**(写真①)と大宮で夕食をご一緒させていただきました。富田さんは高校の6期上の先輩で、以前「浦高百年の森」で歌声を聞かせていただいたことはあったのですが、昨年の秋にお話させていただくまではご縁がありませんでした。



昨秋、富田さんとお目にかかったときに、名刺を出した私に、富田さんから「**県立春日部高校の音楽ホールでコンサートが開くことができますか**」とのお話があり、さまざまな話の中から「**中高生のためのクラシック・コンサート ～歌曲とオペラ～**」という企画が生まれました。春日部地区浦高会の創立15周年記念事業の一環として今年10月に実施するつもりで準備を進めていたのですが、今秋はホールの耐震改修が行われるため断念しました。昨夜は、そのお詫びと次の機会についての相談をさせていただき、来年の初夏を目途に進めることになりました。

富田さんは、武蔵野音楽大学声楽課を卒業後、ウィーン国立音楽大学オペラ課、リート課を最優秀で卒業され、ウィーン国立歌劇場などとの専属契約を行い永住されているそうです。日本にはお母様がいらっしゃるため毎年春と秋に来日されるそうで、来日された時には、日本でも公演をされており、今回も5月17日(土)にさいたま市文化センターでコンサートを予定されています。演目のひとつ『椿姫』では、パリの高級娼婦のヴィオレッタ(ソプラノ・山田沙綾香)と彼女を好きになってしまったアルフレードの父・ジョルジョ・ジェルモン(バリトン・富田千種さん)とのやりとりが楽しめるそうです。さらに、今回のコンサートでは、こうしたオペラの場面についての解説や訳詞がパンフレットに載せられるそうで、門外漢の私でも気軽に楽しめそうです。(^^)



ウィーン国立歌劇場(オペラ座、写真②)は、高額な席だけでなく、500円程度で立ち見ができるそうで気軽に歌劇を楽しめるそうです。25万人規模の都市で、劇場や楽団の維持のために年間30億円の市予算を割いているという話を伺い、歴史と文化に対する価値観の差を感じさせられました。(^^)

さて、富田さんとお話をさせていただいていると、さまざまな人脈を通じて社会貢献ができるような構想が湧いてきます。富田さんも65歳になり、今年から年金をもらえるようになったそうですが、「新しい世代の歌劇や歌曲のファンを増やし、声楽家を育てるために自分の声が続く間、さまざまな活動をしていきたい」と情熱的に話される姿はとて若々しく感じられました。そんな富田さんとのお話を振り返っていると、今朝の朝日新聞にこんな記事が、私もまだまだ50代、意気と体力を鍛えなくては・・・と。

* *

◆意気と体力を・・・!

心のポケットにしまっておいた詩句を、人はときおり取り出しては味わい直す。そうした一編に米国の詩人ウルマンの「青春」がある。「**青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う**」の冒頭はよく知られる(作山宗久訳)▼そして、「**年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる**」と続いていく。かのマッカーサー元帥も愛読(あいしょう)していた名詩を、本紙地域面の小記事に思い出した。**神奈川県大和市が先ごろ、「60歳代を高齢者と言わない都市」を宣言した**▼広報や案内にも69歳までは高齢者と表記せず、他の文書などもそのつど検討していくという。「豊かな知識と経験は市の宝。はつらつと活躍していただきたい」。発案した大木哲(さとる)市長は自らも65歳だそうだ▼おととい発表された総務省の人口推計では、65歳以上が25・1%となり初めて4分の1を超えた。一方で、14歳以下は12・9%で過去最低になった。人口ピラミッドは安定感から遠く、3年続きで人口は減っている▼「お若く見えますねと言われたら、年をとったなと言われていると思え」と米国の随筆家アービングが言っていた。超高齢化と人口減の社会が甘いはずもないけれど、皮肉をきかせた警句より、ここはウルマンの前向きを支持したいものだ▼リタイア後、あこがれた「毎日が日曜日」の暮らしを無聊(ぶりょう)がる人もいる。あとは人生訓と説教癖というのでは少々寂しい。60代は高齢者に非(あら)ずの意気と体力を、50代は今から鍛えるところか。【朝日新聞「天声人語」4月17日】

* *

「**山田沙綾香 & 富田千種** **ジョイントコンサート**」、5月17日(土)午後2時30分開演、さいたま市文化センター小ホール、3,000円です。

